夕刊フジ　2021年11月20日（19日発行）

# ニッポン ドクター和の 臨終図巻

## 享年99 心不全

## ㉛ 作家、天台宗大僧正　瀬戸内寂聴

# 不死鳥のような好奇心と行動力

長尾和宏（ながお・かずひろ）
医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

医者の僕が言うのはおかしな話ですが、「この人は死なないのかもしれない」と感じる人が時々います。105歳で亡くなられた日野原重明先生がそうでした。そしてこの御方も、ひょっとしたら、ずっと生きているんじゃないかと思っていました。

作家で天台宗大僧正の瀬戸内寂聴さんが11月9日に京都市内の病院で亡くなりました。享年99。死因は心不全との発表ですが、お見事な大往生だったとお見受けします。8月末に公式インスタグラムで、「私は風邪も引かず、コロナに感染することもなく、元気にしています」と笑顔を見せていましたが、10月に体調を崩し入院をされました。

寂聴さんは2014年、92歳のときに、脊椎を圧迫骨折し、骨セメント注入療法の手術。その後すぐに胆のうがんが見つかっています。92歳という年齢であれば、体力的に手術を乗り越えられる保証がないため、何もせずに経過観察で様子を見る場合が多いでしょう。しかし寂聴さんは、がん摘出手術を決断。見事に賭けに勝ちました。「取り出した胆のうを見せてもらいましたが、焼いて食べたら美味しそうと思わず言ったぐらい、きれいな色をしていました」とインタビューで語っています。

しかしこの大病により、退院後4カ月寝たきりに。その翌年、朝日新聞の連載「寂聴　残された日々」で、僕が書いた『平穏死　10の条件』を読んだと書かれているのを見つけたときは、釈迦に説法とはまさにこのことだと、気恥ずかしくもなりました。しかしあの時、お会いしておくべきだったと後悔しています。

90代の高齢者が大手術の後、4カ月も寝たきりになれば、再び歩けるようになるのは困難です。認知症も確実に進行します。しかし寂聴さんは、リハビリを頑張って再び歩き、執筆活動も精力的に再開。不死鳥としか言いようがありません。

今、僕の手元に『寂聴　九十七歳の遺言』という本があります。どのページも目から鱗の言葉が並びますが、一番励まされたのは次の文章です。

〈人間、何でもやってみないとわからない。やってみようかということは、何でもやってみたほうがいいのです。どうせこの世は一回しかないのですから。（中略）いくつから始めてもいい。「この年でいまさら」なんていわないでください。70歳からそれを初めて75歳でそれが花開くかもわからない。80歳でも90歳でも同じ〉

人間、死ぬその日まで何かを始めることができる。長寿の最大の鍵は、好奇心と行動力だと寂聴さんが証明してくれました。